

岐阜月朋

ぎふづうぼう

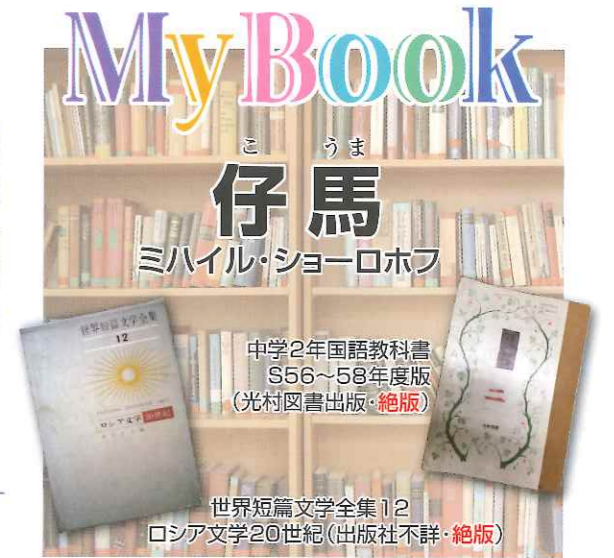
- 正信偈とは (藤原正寿)
- それぞれの報恩講 (第10組・通性寺) ● コラムしょうしんげ
- 現代の課題に学ぶ研修会 葬儀と人間 —「死という他者」 (竹橋 太氏)
- My Book

119



音楽の流れる報恩講・通性寺

安八町氷取



——人として生まれ、人として生きる喜び——

救いとは何か?とても難しい問題です。人間が生きる上での本当の幸せとはなんでしょうか?

ずいぶん前のことですが、中学の国語の教科書に「仔馬」という短編小説が教材として掲載されていました。作者はロシアのノーベル賞作家「ミハイル・シヨーロホフ」です。

戦争中、戦争の真只中、望まれず生まれてしまった仔馬、隊長に足手まといになるという理由で殺処分を命令された主人公のトロフィム。

彼は、戦争で人を殺すことに慣れていた「殺」ということにおいては何の躊躇もないはずなのに、この仔馬の命を奪うことがなかなかできない。何となく銃口を向けるが仔馬の目を見ると引き金を引くことができない。

どうしても殺せないトロフィムがある日、連隊で渡河をする場面。その最中に敵に見つかり銃撃を受けるのです。みんなほぼ対岸に上陸したのですが、仔馬だけがまだ河の中ほどでぐずぐずして渡り切れない。そんなときトロフィムは自分の命を顧みず河の中央の仔馬の所に戻るのです。そして仔馬と共にもう少しで対岸にたどり着くというところで、仔馬の命を引き換えに、敵の銃弾を浴び、自分は命を落とすのです。

なぜ仔馬を助けに行ったのか。たかが仔馬です。人をどれほど殺してきたか、数えきれないほどの殺人を犯してきたプロなのに。しか

し銃弾を浴びたトロフィムがとても満足そうな笑みを浮かべながら、口から血を流し息絶えるのです。その血の赤はトロフィムが人間として死んでいったことを暗示しています。極悪非道の殺人者が自分の命を捨てても守りたいものがある。罪の限りを尽くしてきた主人公の幸せとは何であったのか?戦争とは何かという問いとともに、救われるはずのない悪人がどう救われていくのか、考えさせられる作品です。

もう何十年も前に読んだこの作品が私の記憶の中でいつまでも残っています。(尾)



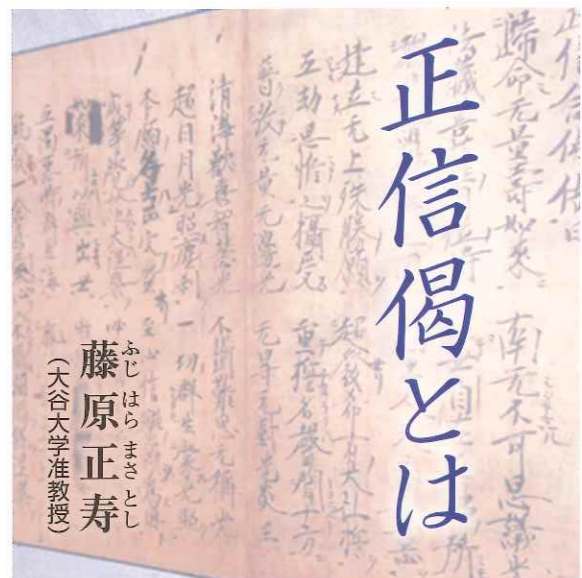
光村ライブラリー【中学校編】3 (光村図書出版・価格不詳)

今号掲載の第10組通性寺様の音楽法要。親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の際に、岐阜教区でも厳修され、全員でお念仏を申した記憶が甦ってきます。

桜の花が咲く4月1日、真宗本廟では親鸞聖人御誕生会として音楽法要がお勤めされています。10年ほど前からこの法要と記念講演には毎年出かけていきます。様々な和讃がテノール独唱に続き混声で合唱されていきます。念仏讃の南無阿弥陀仏では、アルトから順に重なり合ってくる合唱に、得も言われぬ心地よさを感じ、毎年出会う音楽法要ですがその都度違った感動を覚えます。

特に今年は昨秋亡くなった母のことを思い出して聴いていました。認知症になった母が最期まで歌えた恩徳讃。恩徳讃だけは頭の片隅に残っていたのだと思うと共に、和讃が音楽となって心に残り、様々な感動が仏教讃歌となって届けられてくること、今ここに生き、生かされていることに感謝した一日でした。(憲)

編集後記



藤原正寿
(天谷大学准教授)

「正信偈」は、私たち真宗門徒にとつて、はるか以前からお内仏の前でおつとめしてきたお聖教です。私たちの宗祖である親鸞聖人は、本願念仏の教えが釈尊の時代から七高僧を経て、ご自分にまで正しく伝えられてきたことを、深い感銘をもって受けとめられました。「正信偈」は、親鸞聖人がその感銘を味わい深い詩(偈文)によつて、後の世の私たちに伝え示してくださった「いのちの偈」なのです。

親鸞聖人は、「教行信証」に「正信偈」を掲げられるに先だつ

本当の居場所

「帰命無量寿如来 南無不可思議光」この二句から「正信偈」は始まります。この二句は、帰敬といわれています。阿弥陀如来を敬い、阿弥陀如来が私たち衆生を救うために起こした本願を自らの依りどころとして生きます、という親鸞聖人の信念が表明されているのがこの二句です。「帰命」という言葉と、次の句の「南無」とは同じ意味です。親鸞聖人は、「南無」の言は帰命なり。(中略)「帰命」は本願招喚の勅命なり。』と仰います。私たちにとつての本當の依りどころ、居場所は、仏の本願によつて呼ばれること、仏から願われたいのちを生きること、仏に気づくことによつて獲得されるのだといわれるのです。

私たちが普段目にする書物のほとんどは、最後に結論が書いてありますが、正信偈では、この最初の二句に結論とも言ふべき、親鸞聖人が獲得した信心の核心、

て、まず「正信偈」をお作りになつた、そのお気持ちをも、「しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閱して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく」と述べておられます。「大聖の真言に帰し」とあるのは、釈尊が説かれた真のお言葉を依りどころとする、ということですが、釈尊は、「大無量寿経」というお経をお説きになりました。そしてこのお経のなかで、阿弥陀如来がすべての人を救いたいと願われた、いわゆる弥陀の本願のことを教えられたのです。それが大聖の真言、つまり釈尊の真のお言葉ということなのです。親鸞聖人は、「正信偈」を作るにあつて、この「大無量寿経」の教えを依りどころとされたというわけです。

次の「大祖の解釈に閱して」というのは、インド・中国・日本の三國に出られた七人の高僧が、「大無量寿経」の教えを正しく受けとめられた、そのご解釈を手がかりにする、ということですが、親鸞聖人は、「大無量寿経」につい

これがなければ浄土真宗ではないと言ふくらい強い意味が述べられているのです。それでは後の百十八句に何が書いてあるのかというと、最後の二句を除いた全部が、どのようにして親鸞聖人にこのような信心が獲得されたのかという理由が述べられている。これが正信偈の特徴になります。

因をいただく教え

正信偈の前半は、先ほど言いましたとおり、「依経段」とよばれ、親鸞聖人が大切にされた「浄土三部経(『大無量寿経』・『観無量寿経』・『阿弥陀経』)」に依つて、親鸞聖人の阿弥陀如来と釈迦如来への恩徳が述べられています。最初に阿弥陀如来の恩徳を述べるにあつて、親鸞聖人は、阿弥陀如来という名ではなく、「法蔵菩薩因位時」からの八句では、法蔵菩薩という名で説かれます。阿弥陀如来がまだ仏になる前の因の位つまり、修行の身であった時の名で示しているのですが、ここに大切な事

てのご自分の見解を主張しようとしたのではなく、三国の七高僧のご教示を仰がれたのです。親鸞聖人は、ご自身を見つめるのに大変厳しい眼をおもちでした。ご自身を、愚かで罪深い凡夫であると思つておられたのです。実は、そのような凡夫が、何としてもたすけたいというのが、「大無量寿経」に説き示されている阿弥陀如来の本願なのです。親鸞聖人は、このような「大無量寿経」の教えを依りどころとし、また、このお経の教えについて先輩がたのご解釈によつて、釈尊と阿弥陀仏の恩徳がまことに深いことを信じさせていただき、知らせてもらったことを喜んでおられるのです。そのことを「仏恩の深遠なるを信知して」といつておられるのです。そして、自ら信ずるとともに、人にも教えて仏の恩の深いことを信じさせるために、「正信偈」をお作りになつたのです。

「正信偈」は、全体を大きく二つの部分に分けて見られています

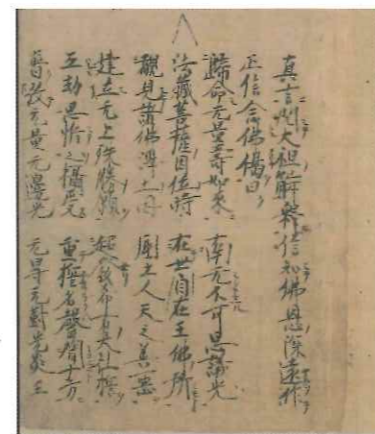
が示されています。私たちは、自分の思い通りに生きていきたいと思ひ、それが自由な生き方であり、幸せな人生であると思つています。しかし、実際のところ、どのように生きていくことが本當に幸せで、自由な生き方であるかをわかつてはいないのではないのでしょうか。

周りの状況に振り回されて、自分だけ出遅れたり、取り残されてはたまらないという、強迫観念にとりつかれて、いつも戦々恐々としています。その様な不安と恐れから、私たちが解放しようというのが、「一切恐懼に、たために大安を作さん。」という法蔵菩薩の誓いの内容です。目先の楽しみではなく、不安を取り除き安らぎを与えたい。そのためには、私たち一人ひとりの不安の原因が何であるかを知らせることが大切であるというのが、法蔵の願いです。

私たちは、いつも願いを起しています。しかしその願いは、状況の中で起こす願いです。病氣

す。最初は、「依経段」といわれていますが、これが、先ほどの「大聖の真言」にあたる部分です。すなわち、仏の大悲が説かれている「大無量寿経」の要となる教えについて讃嘆してある部分です。いま一つは「依釈段」といわれますが、これは「大祖の解釈」にあたるところで、七高僧お一人お一人の教えを紹介し、それぞれの徳を讃えてある部分です。

私たちが、日々のお勤めるときに「正信偈」をあげ、またこうして「正信偈」のところに触れようとするのは、愚かな生き方しかできていない者が、親鸞聖人のお勧めの通りに、「大聖の真言」と「大祖の解釈」を讃嘆し、その恩徳に感謝することになるのです。



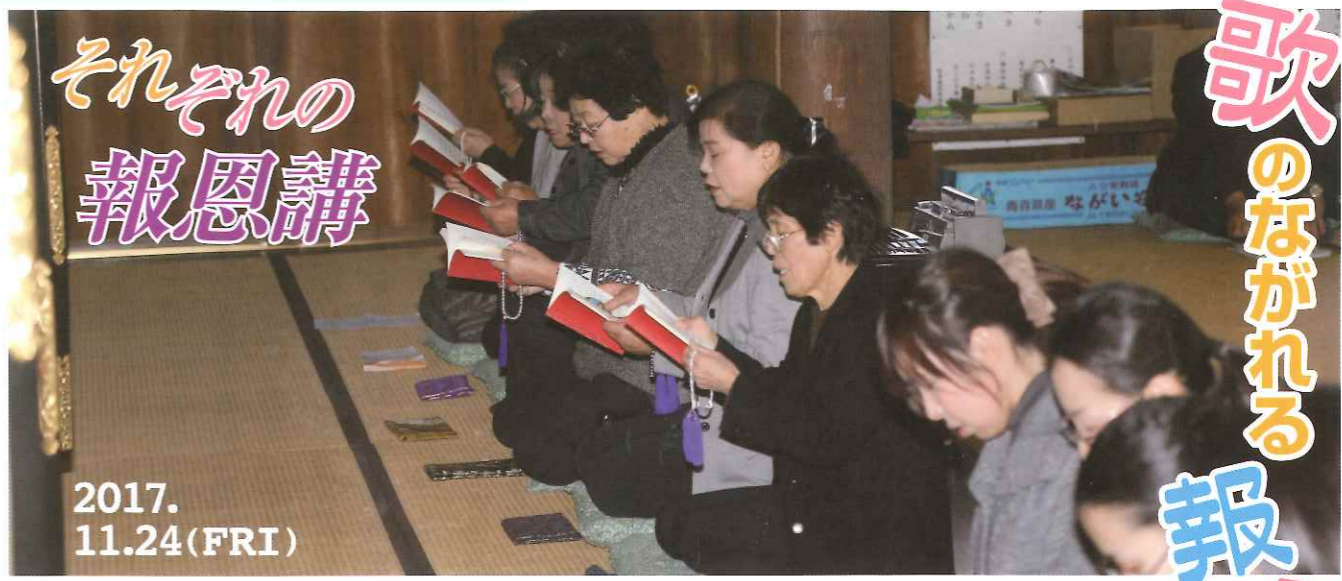
の時は病氣さえ治ればと願ひ、受験の時は、合格さえすればと願う。その願いが叶えば、満足するのかわかると、ちゃんと次の願いを起こしている。どこまでもいつても終わりがありません。

つまりご利益としての果ばかりを追い求めている私たちに、その願いがどこまでも切りがなく、最後は不平不満ばかりの欲求不満に陥つていくことを示し、仏さまの方が私たちの方にかけてくださっている願ひに目覚める事の大切さを親鸞聖人は、教えてくださっているのではないのでしょうか。つまり、果を追い求める宗教から、因に目覚めていく宗教への質的転換です。これが果としての阿弥陀ではなく、因位法蔵の名で、阿弥陀如来の恩徳を語るうとする親鸞聖人の真意です。阿弥陀さまに手を合わせることで、こちらの願いを叶えてもらうのではなく、阿弥陀さまから願ひを受けていくのちの意味に気づき、出遇つていくことを親鸞聖人は教えておられるのです。



「一歩一歩を踏みながら」もつと大きな声で！と声をかけられ、その響は次第に調和していき、厳かに儀式は進んでいった。長年のうちに染み付いたであろうその動きと表情からは、まさに親鸞聖人に学ばねばならぬ身だという報恩の相を感じた。三礼では「三帰依(パーリ文)」を堂内の皆と唱和し、住職の嘆徳文の拝読に熱が入り、皆ともに聞き入っていた。

外陣の女性方の『真宗宗歌』が歌われるなか、座を下りられ元の位置に着座された。添動も皆でできるようにと。正信偈草四句目下念讃、海三和讃「三朝浄土の大師等」次第三首、回向、願以此功德、が勤められた。これらはすべて真宗大谷派勤行集(赤本)に収められている内容である。慣れ不慣れはあるのだけれども、そこにはみななどの念仏、御同朋御同行の姿、すなわちサンガが表されていた。(内山徹郎)



それぞれの報恩講

2017. 11.24(FRI)

歌のながれる報恩講

第10組 通性寺

通性寺は安八町氷取にて暮わっている。ここでは、独特の報恩講の姿がある。それは、歌による登高座だ。登高座というと、僧侶の出仕後、合掌が解かれ、伽陀の発声が始まり、導師が尊前に配置されたやや高めの高座(高座)に上がり、礼拝、焼香、祖徳を讃える報恩講私記、嘆徳文を拝読するものである。そののち座を下り、元の位置に着座して、添のお勤めが始まる。しかしながら、登高座の間は、ご門徒さんは儀式を見守るだけであるし、添のお勤めも普段と異なるためなかなか入っていけない。「浄土真宗においては、御同朋御同行、ともに念仏。皆がプレーヤーであり、一人ひとりがご本願に遇い報恩謝徳の念仏をしていくのである。」



そう思われた先代住職は「ご門徒の皆とともに報恩講をおつとめしたい」と思い立ち、歌による登高座を始められた。午後一時、喚鐘の音が静まることも、高木住職が厳肅な面持ちで内陣に出仕され着座された。外陣に横一列に並ばれていたご門徒の女性方(中には若いお母さん方もおられた)による仏教讃歌『みほとけは』の歌がはじまり、高木住職はゆっくりとたちあがられた。



しょうしんげ

本師源空明仏教 憐愍善悪凡夫人

本師源空は、仏教に明らかにして 善悪の凡夫人を憐愍せしむ

一年前90歳でお亡くなりになられたおじいさんの月参りに出かけています。その方は25年前に奥さんを亡くされ、ひとり暮らしでした。生前娘さん宅に少し同居されてみえましたが、やはりひとりの方が気楽とこのことで、岐阜に戻ってみえました。

彼(故人)は5人兄妹の長男さん。次男さんは2年前に亡くなされましたが、3人の妹さんとはご健在。今は誰も住んでいない故人の家に必ず毎月妹さん達、娘さんの4人がお参りに集まり、賑やかに昔話に花が咲きます。

故人は父親が早く亡くなられたので、父親代わりとなり、黙々と働き、弟妹さん達を養いました。ある日、妹さんからこんなことを言われました。「兄は私たちの世話をしている時、なぜ自分だけがと迷い、悩んだりしなかったであろうか?」私たちが兄に何も恩返しでき

なかった。感謝するばかり。そのため迷いや悔いが多々残ります」と。法然上人(源空)は、「専修念仏」の道を歩まれ、一心に専ら阿彌陀仏の名号を称える念仏を勧められました。ここに出てくる凡夫とは、煩惱にとらわれて迷いから抜け出られない衆生、つまり普通の人の、どこにでもいる人のことです。法然上人は、善悪に関わらず、悩み多いすべての凡夫を憐れみ、本願に素直に従うしかないとを説き示されたのです。

また、ある先生は「人生というのは、苦勞したり、失敗したり、失敗ばかりですけれど、念仏に遇えば全部生き返るのです」とも言われました。まさに法然上人の教えのそのままです。私たち悩み多き凡夫。もう一度自分の人生を振り返り、念仏を申し、その中で何かを感じていただければと思います。

今月もまた4人が集まり、賑やかに参りされるのでしようね。

現代の課題に学ぶ研修会

葬儀と人間

「死という他者」



竹橋 太氏
(儀式指導研究所)

儀式と共同体

儀式とは、人を引き付け、共同体を作ります。つまり共同体を前提としています。その中で形があり、それぞれの執行者が全体の一つの表現の駒になることで、役割を果たすということになります。人間が一つの構成要素となることができる表現なのです。では、なぜ儀式である葬儀に定まった形があるのでしょうか。

それは、みんなが作ってきた形だからです。亡くなった人を送るということ、少しずつ変化させながら、みんなが納得する形になっているわけです。その形を繰り返しているのです。だから、それは共同体に共有される一つの智です。逆にいうと、今、儀式が成り立たなくなってきたのは、共同体がなくなってきたからだと考えます。共同体は、とくに昔は生産と

浄土真宗の仏事としての葬儀の役割

ついで何かを意味しているわけではない。「死」の世界の発生とは、「死んでいない世界」と「死の世界」とを分けるということ。二分法が発生したということに他ならず、それは、「生」の世界が同時に発生したということ。これを意味している。

上田紀行「宗教クライシス」より

「この人は死んだ」と分かるということは、死んだ人と、それを見ている私がいるということ。逆に言う、「私」がいるということとは同時に、私以外のもの、つまり「世界」が発生しているということなのです。縁起ということ。

もし死んでいる人を見て「私」が発見されたのなら、「私」というものは、死ぬものとして発見されています。死ぬ世界を生きている私として誕生しているのです。「死」という思うとおりにならないもの、死という他者に対して、人間はいつでも考えるものとして生まれてきているわけです。

浄土真宗の信心は機法二種深信といわれます。阿弥陀さまが法で、われわれが機です。機とは、罪悪深重ということ。無始爾来の輪廻を生きている者ということ。正しいものにあると、われわれが偽物であるということがわかります。そして、偽物として生きることができない。だからこそ聞法もできる。迷っている者、すぐわれない者として、すぐわれない者として、その自分自身になる、生まれるということが、浄土真宗のすくいなのです。それが「南無阿弥陀仏」という形、表現として、また答えすなわち「果」として既に与え

いうことに結びついて、生死をもにしている者の集まりでした。現在、人間の生活は、科学や経済の発達で、どんどん便利になって、一人でも暮らせるようになってきました。一人で暮らせるということは、共同体を必要としないということ。共同体を必要としない人は、儀式などしなくてもいいわけです。皆で送る、送られるということがなくてもいい、ということ。共同体がなくなってきたというのと、儀式がなくなっていくということは、同じことなのです。

葬儀を始めることによる人間となった

「人」が死んでいると分かるということは、どういうことでしょうか。この点について、約六万年前にネアンデルタール人が死



生し、死の儀礼が行われていたとすれば、それを人類における宗教の萌芽と認めることに異論はないだろう。この宗教の萌芽は、人類における「世界」の発生とも重なり合っている。死の観念が発生したということとは、「死」だけに

られているのです。そういう既にすぐわれた人の表現をなぞっている、とも言えます。形からその意(こころ)へ、それがお念仏という表現の特徴です。儀式もまた行うこと(自力)です。真宗の儀式はすぐありません。真宗の儀式はすぐである「南無阿弥陀仏」(他力)を表現しています。それは葬儀の意義という点においても全くかわらない、浄土真宗の仏事の意義なのです。

「現代の課題」という視点に立つて、現代の葬儀の変化やこれからの葬儀はどうあるべきかというお話なのかと思いましたが、先生の講義は、「なぜ葬儀を勤めるのか」、「そもそも葬儀とは何か」という、原点から見つめる講義で、私たちそれぞれに問いを求められたお話となりました。「答えはないので、自分で考えましょう」という先生からの投げかけをいただき、今一度振り返る機会をいただいた研修会となりました。
(文責・岐阜教区出版委員会)

